

# 間違わない補聴器の選び方・着け方(2)

博士補聴器代表 由井 宏知

## 認知症と難聴

### —最新の研究から

厚生労働省の調査では、日本の認知症患者は二〇一二年に四六二万人を数え、高齢者の四人に一人は認知症または予備軍といわれています。二〇二五年には七百万人を超えるという予測もでております。

厚生労働省の認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)では認知症の危険因子の一つとして難聴が挙げられ、難聴と認知症の関係が注目され始めています。米国では十年以上前から難聴と認知症の関係について研究が進められており、日本でも調査が実施されています。今回はその最新情報をご紹介します。

米国ジョン・ホプキンス

の見解を示しています。また、これらの脳部位は単独では機能せず、他の部位と連携して一つのことを行っており、その結果、一つの

部位の体積が減少すると、脳全体の悪化に繋がる危険性があります。音声の処理以外に、脳の中側と下側頭

回は記憶と感覚を統合させる役割もあり、どちらかの部位が萎縮することは、アルツハイマー型認知症の初期

症状とも考えられています。またリン博士は、難聴者は、社会的に引きこもりがちになり、通常の交流が不足することも組み合わせられて認知機能

低下の要因となっており、側 中側 下側頭回

の萎縮が著しい。リン博士は難聴者において音声言語を処理する分野に萎縮が見られること(二聞こえないこと)が原因で起こる可能性が高いと

は、難聴が起こると、視覚・触覚等其他の感覚を司る脳領域が、聴覚を処理していた脳領域に取って代わり、喪失した聴覚を代償しようとして脳が変化し、認知機能に深刻な悪影響を及ぼす恐れがあると報告しています。

日本補聴器工業会による「JapanTrak2015」でも「難聴をそのまま放置していた人のうち76%の人がもの忘れの程度がひどくなったと自覚していた」と報告されています。

以上のことから難聴と脳の認知機能には関連があることが示されています。それと同時に、難聴の早期治療の重要性も報告されており、補聴器をしている難聴者ではその進行が抑えられる傾向があると報告されています。



聴力や補聴器の効果を測るための防音室内